



本書は東京大学出版会のシリーズ「日本の開発協力史を問いなおす」（全7巻）のうち、最後の一冊である。著者は東京大学東洋文化研究所新世代アジア研究部門の佐藤仁教授だ。他の著書には『反転する環境国家』『野蛮からの生存の開発論』『「持たざる国」の資源論』『希少資源のポリティクス』などがある。

本書を目次に沿って紹介すると、序章「開発協力を引き出す力」。第1部は「走り出す経済協力—1954—65年前後」で、第1章が「自立の夜明け—戦後日本を東南アジアに押し出した力」。第2章が「開発の東南アジア—援助の受け入れ体制はどうつくられたのか」。第3章が「逆風の現場—信頼が国境を越える条件は何か」。

第2部は「経済協力から開発援助へ—1966—89年前後」で、第

4章として「後発援助国への圧力—日本はなぜ援助大国になれたのか」、第5章は「権威主義体制の援助吸収—援助は東南アジア諸国家に何をしてきたのか」、第6章は「続出するODA批判—問題案件はなぜある時期に集中したのか」。

第3部は「開発援助から開発協力へ—1990年代から現在」。第7章は「開発協力と『人間』の発見—日本のODAは人間をどのように見てきたか」、第8章は「塗り替わる援助地図—新興ドナーは伝統ドナーに置きかわるか」、第9章は「『問題案件』のその後—軌道の変化をもたらしたのは何か」、終章は「開発協力が促す力」。

著者は、はじめに「本書は開発協力が計画されて現場に何らかの影響を及ぼすまでのプロセスを自立と依存の視角から掘り下げる試みである」と述べている。全体の印象としては、第1部第2章の「開発の東南アジア—援助の受け入れ体制はどうつくられたのか」と第3章「逆風の現場—信頼が国境を越える条件は何か」では登場する穂積五一氏（海外技術者研修協会の創設者）を、評者はよく知っているだけに共感を覚えた。なかでも第4節「経済協力への夢と失望—穂積五一の目」にはそれなりに理解できるところが多い。

筆者が一番関心を抱いた部分は第3部「開発援助から開発協力へ—1990年代から現在」である。

その第3部第7章の「開発協力と『人間』の発見—日本のODAは人間をどのように見てきたか」が圧巻である。その第1節は「見えない援助理念」、第2節は「援助理念の源流と日本的変容」、第3節は「理念と実践—人間の安全保障と緒方改革」、第4節は「何のための人づくりか—個人と集団」、第5節が「日本式集団主義の可能性」。

その中の第3節「理念と実践—人間の安全保障と緒方改革」では、人間一人ひとりに着目し、生存・生活・尊厳に対する広範かつ深刻な脅威から人びとを守り、それぞれの持つ豊かな可能性を実現するために、保護と能力強化を通じて持続可能な個人の自立と社会づくりを促す考え方を提示している。これまでの「国家の安全保障」概念から、「人間の安全保障」への思考の転換を提示した緒方のビハイビアは、その考え方を国家から個々の人間へ向けたという意味で、わが国開発協力の歴史的な展開となった。

従来 of 伝統的な援助論の枠にはまらずに、哲学的探索から現実対処に至るまで幅広く探求する著者の研究心に敬意を表したい。

（本誌編集主幹・荒木光弥）



開発協力のつくられ方  
—自立と依存の生態史

佐藤仁 著  
東京大学出版会  
4,000円+税